

第二パウロと真正パウロ

——新共同訳における対応箇所翻訳問題——⁽¹⁾

辻 学

問題の所在

第二パウロ書簡（Ⅱテサロニケ、コロサイ、エフェソ、牧会書簡）はいずれも、真正パウロ書簡の言葉づかいを巧みに取り込むことで、いかにもパウロ自身が書いた書簡であるかのような装いをしている。また、箇所によっては、パウロの表現を借用しつつ、微妙な違いをつけることで意味を「改変」という試みもなされている。こういった工夫を読み取ることが、第二パウロ書簡の執筆意図を理解する上では重要になってくる⁽²⁾。したがって、テキストを翻訳する際には、この対応関係が十分にわかるような訳語を選択する必要がある。

しかしながら新共同訳聖書においては、文献依存関係のある文書間での訳語の一致に注意が払われていない。このことはすでに、ユダ書と第二ペトロ書の関係について指摘しているが⁽³⁾、本稿ではこの問題を、第二パウロ書簡を題材にして考察したい。検討に際しては、口語訳（新約 1954 年）、そして新共同訳聖書（1987 年）以降に発行された翻訳の中からとくに新改訳第 3 版（2003 年）と岩波訳（ここでは 2004 年発行の合本）、フランシスコ会訳（2013 年発行の合本）、さらに個人訳の中から田川建三訳（2007 年／2009 年⁽⁴⁾）を比較のために併せて参照する。

(1) 本稿は、2013 年 3 月 15 日に行われた、日本聖書協会新翻訳事業新約部会における講演「新共同訳における対応箇所の翻訳問題——第二パウロ書簡の場合——」に基づいているが、他の諸訳との比較考察等を新たに加えて改稿した。

(2) 詳細は拙著『偽名書簡の謎を解く：パウロなき後のキリスト教』（新教出版社、2013 年）を参照されたい。

(3) 拙稿「ユダ書・第二ペトロ書の翻訳について——新共同訳を中心に——」、『聖書翻訳研究』（日本聖書翻訳研究会）第 31 号（2008 年）51-63 頁。

(4) 「パウロ書簡その一」が 2007 年、「パウロ書簡その二／擬似パウロ書簡」が 2009 年発行（いずれも作品社刊）。

1. IIテサロニケ書

(1) IIテサ 2.1 / Iテサ 5.12

IIテサ 2.1: Ἐρωτῶμεν δὲ ὑμᾶς, ἀδελφοί, 「さて、兄弟たち、……についてお願いしたい。」

Iテサ 5.12: Ἐρωτῶμεν δὲ ὑμᾶς, ἀδελφοί, 「兄弟たち、あなたがたにお願いします。」

この両箇所は逐語的に一致しており、IIテサロニケ書の著者は意図的にパウロの言い方を真似しているのである。したがって、その模倣が一目でわかるよう訳し方を揃えるべきだし、この程度の短い表現ならそれは難しくない。IIテサロニケ書ではδέを「さて」と訳出しているが、これも有無を揃えるべきである（δέを訳出するかどうかを全巻にわたって揃えるべきだということではない）。

他の翻訳を見ると、田川訳は「兄弟たちよ、あなた方にお願いする」で統一されている。岩波訳も、IIテサロニケ書の方で「さて」がつけられている以外は「兄弟たちよ、……お願いする」で揃っている。他方、口語訳は「さて⁽⁵⁾ 兄弟たちよ。……あなたがたにお願いすることがある」（IIテサ）と「兄弟たちよ、わたしたちはお願いする」（Iテサ）。新改訳は「さて兄弟たちよ。……あなたがたにお願いすることがあります」（IIテサ）と「兄弟たちよ。あなたがたにお願いします」（Iテサ）。フランシスコ会訳は「さて兄弟たちよ。……あなたがたにお願いすることがあります」（IIテサ）と「兄弟たちよ。あなたがたにお願いします」（Iテサ）⁽⁶⁾ といった具合に、いずれも異なる翻訳をあてている。

(2) IIテサ 3.8 / Iテサ 2.9

IIテサ 3.8: ἀλλ' ἐν κόπῳ καὶ μόχθῳ νυκτὸς καὶ ἡμέρας ἐργαζόμενοι πρὸς τὸ μὴ ἐπιβαρῆσαι τινα ὑμῶν 「むしろ、だれにも負担をかけまいと、夜昼大変苦労して、働き続けたのです。」

Iテサ 2.9: τὸν κόπον ἡμῶν καὶ τὸν μόχθον· νυκτὸς καὶ ἡμέρας ἐργαζόμενοι πρὸς τὸ μὴ ἐπιβαρῆσαι τινα ὑμῶν 「わたしたちの労苦と骨折りを [覚えているでしょう]。わたしたちは、だれにも負担をかけまいとして、夜も昼も働きながら」

この箇所も、IIテサロニケ書の著者は明らかにIテサロニケ書の言葉づかいを意識しているのだから、そのことがわかるよう、もっと訳文を揃えることができるはずで

(5) ここから、新共同訳、岩波訳、新改訳、フランシスコ会訳のIIテサ 2.1における「さて」は口語訳の影響だとわかる。

(6) 新改訳とフランシスコ会訳の訳文は、IIテサロニケのみ「お願いすることがあります」と訳している点で口語訳に非常によく似ており、強い影響がうかがわれる。

ある。Ⅱテサロニケの「大変苦勞して」は意識しすぎで、Ⅰテサロニケ書が的確に「勞苦と骨折り」と訳出しているのを知らずに翻訳したとしか考えられない。また「働き続けた」とする必要もない。

興味深いのは、口語訳の方がこの箇所では訳語の一致がきちんと図られていることである。「あなたがたのだれにも負担をかけまいと、日夜、勞苦し努力して働き続けた」(Ⅱテサ)。「あなたがたはわたしたちの勞苦と努力とを記憶していることであろう。すなわち、あなたがたのだれにも負担をかけまいと思って、日夜はたらきながら」(Ⅰテサ)。またフランシスコ会訳(「苦勞し、ほねをおった(おって)»)もここでは対応関係がはっきりとわかる訳し方になっている。他方新改訳は、この点をあまり意識していないように見受けられる(Ⅱテサ「昼も夜も⁽⁷⁾勞苦しながら働き続けました」、Ⅰテサ「あなたがたは、私たちの勞苦と苦闘を覚えているでしょう。……昼も夜も働きながら)。面白いのは岩波訳で、Ⅱテサロニケ書では「夜も昼も苦勞と骨折りをもって働い〔て模範を示し〕た」としているのに、Ⅰテサロニケ書では「あなたがたは私たちの勞苦と骨折りとを憶えている。……夜も昼も働きながら」となっている⁽⁸⁾。同じ単語に「苦勞」と、それをひっくり返した「勞苦」をあてているのは、それぞれの翻訳を担当した訳者間の摺り合わせがなく、さらに訳文を閲読した担当者が見過ごしたためであろう。

(3) Ⅱテサ 1.10 / ローマ 1.16

Ⅱテサ 1.10: ὅταν ἔλθῃ ἐνδοξασθῆναι ἐν τοῖς ἁγίοις αὐτοῦ καὶ θαυμασθῆναι ἐν πᾶσιν τοῖς πιστεύουσιν, 「主が来られるとき、主はご自分の聖なる者たちの間であがめられ、また、すべて信じる者たちの間でほめたたえられるのです」

ローマ 1.16: δύναμις γὰρ θεοῦ ἐστὶν εἰς σωτηρίαν παντὶ τῷ πιστεύοντι, Ἰουδαίῳ τε πρώτου καὶ Ἑλληνι. 「ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです」

ローマ 3.22: δικαιοσύνη δὲ θεοῦ διὰ πίστεως Ἰησοῦ Χριστοῦ εἰς πάντας τοὺς πιστεύοντας. 「すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です」

これは逆に、真正書簡との語法の微妙な違いを無視している例である。ローマ書の「信じる者」(現在分詞)に対して、Ⅱテサロニケ書ではアオリスト分詞で「信じた者」=信者になった者、が意味されているが、新共同訳はおそらくローマ書の用法に

(7) フランシスコ会訳と新改訳は、ⅠテサロニケでもⅡテサロニケでも、「昼も夜も」と訳しているが、ギリシア語底本で「夜と昼」なのをひっくり返した理由は何であろうか。

(8) 傍点は辻。〔 〕は翻訳者による敷衍だが、この敷衍は不要だと思う。

影響されて、同じように訳してしまった。

この違いを訳出しているのは田川訳と新改訳、そしてフランシスコ会訳（ただし「キリスト」を補って「キリストを信じたすべての人」としている）で、口語訳と岩波訳は新共同訳と同様、「信じる者」としてしまっている。「すべて信じる者たちの間で」という表現が逐語的に一致しているので、おそらく新共同訳は口語訳の訳語を借りたのであろう。

(4) IIテサ 3.5 / Iテサ 3.11

IIテサ 3.5: Ὁ δὲ κύριος κατευθύναι ὑμῶν τὰς καρδίας εἰς τὴν ἀγάπην τοῦ θεοῦ καὶ εἰς τὴν ὑπομονὴν τοῦ Χριστοῦ. 「どうか、主が、あなたがたに神の愛とキリストの忍耐とを深く悟らせてくださるように」

Iテサ 3.11: Αὐτὸς δὲ ὁ θεὸς καὶ πατὴρ ἡμῶν καὶ ὁ κύριος ἡμῶν Ἰησοῦς κατευθύναι τὴν ὁδὸν ἡμῶν πρὸς ὑμᾶς. 「どうか、わたしたちの父である神御自身とわたしたちの主イエスが、わたしたちにそちらへ行く道を開いてくださいますように」

田川訳の訳注（643-644頁）が指摘しているように、IIテサロニケ書の「深く悟らせて」は意識しすぎている。直訳は、「主があなたがたの心を神の愛とキリストの忍耐へとまっすぐに導いて下さるように⁽⁹⁾」。Iテサロニケ書の「開いて」も意識だが、「悟らせる」よりはまだ原義に近い（まっすぐに行けるようにということであって、これまで道がなかったわけではない⁽¹⁰⁾）。新共同訳のIテサロニケ書の訳者は口語訳に従っただけだが（「あなたがたのところへ行く道を、わたしたちに開いてくださるように」）、IIテサロニケ書の訳者は口語訳から離れたので（口語訳「主があなたがたの心を導いて、神の愛とキリストの忍耐とを持たせてくださるように」）、かえって原義から離れてしまっている。

この両箇所は、同じ動詞が同じ希求法（新約では稀⁽¹¹⁾）で用いられているので、依存関係が明白な例の一つである。ならばそのことがわかるよう、訳語を揃えた方がよい。だが田川訳を除けばいずれも統一は図られていない。これは、複数の訳者からなる翻訳の場合に生じやすい弊害だと言えるように思うが、Iテサロニケ書とIIテサロニケ書を別々の翻訳者が担当している（からこのような不統一が生じているのであろう）ということ自体にそもそも問題があるのではないだろうか。

(9) 動詞 κατευθύνω は εὐθύνω（まっすぐに導く）に、「向かって」の意の接頭辞 κατα- を付したものだ。

(10) 田川訳のIテサ 3.11に付された訳注参照。

(11) 希求法は新約では稀だが、完全に使われなくなっているわけではない。F. Blass/ A. Debrunner, *Grammatik des neutestamentlichen Griechisch*, 17. Aufl., bearbeitet von F. Rehkopf, Göttingen: V&R, 1990, § 384 参照。

2. コロサイ書

(1) コロ 1.1 / II コリ 1.1

Παῦλος ἀπόστολος Χριστοῦ Ἰησοῦ διὰ θελήματος θεοῦ καὶ Τιμόθεος ὁ ἀδελφός

手紙の差出人を示すこの表現、初めの 11 単語は完全に一致しており、コロサイ書の著者が II コリントの書き出しを真似ていることは疑い得ない。ところが新共同訳では、II コリント書のみ「兄弟テモテ」の前に読点が入れている——「神の御心によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロと、兄弟テモテから」。

この不統一は、新共同訳が口語訳をそのまま写したことに起因するようである。口語訳でもやはり読点の有無による不一致が見られるからである。新共同訳は、口語訳の「御旨」を「御心」、「使徒となった」を「使徒とされた」に書き換えた他はそのまま口語訳を利用したのである。

もしかすると II コリント書の訳者は、「キリスト・イエスの使徒とされた」が「パウロ」にだけかかるということをはっきりさせるために読点を入れているのかもしれない。だがそれならば、コロサイ書の方にも入れるべきであろう。いずれにしても統一が望まれる⁽¹²⁾。

しかし新共同訳は、読点以外は両箇所翻訳が一致しているが、口語訳は翻訳が微妙に違っているし（コロ 1.1 「神の御旨によるキリスト・イエスの使徒パウロと兄弟テモテから」。これが一番直訳だし、上述した誤読の懸念もない）、田川訳も θέλημα を「御旨」（II コリント）・「意志」（コロサイ）と訳し分けたり、「および」を平仮名（II コリント）と漢字（コロサイ）にしたりと、この箇所では微妙な不統一が見られる。岩波訳にいたってはまったく違う翻訳になっており、コロサイ書が II コリント書を真似ていることなどまるでわからなくなってしまう⁽¹³⁾。他の箇所と違って、間テクスト的な分析を細かく施さなくても、ひと目でわかる一致なので、訳文を揃える意志さえあれば簡単にできたはずである。

(2) コロ 2.12 / ローマ 6.4

コロ 2.12: συνταφέντες αὐτῷ ἐν τῷ βαπτισμῷ 「洗礼によって、キリストと共に葬られ」

ローマ 6.4: συνετάφημεν οὖν αὐτῷ διὰ τοῦ βαπτίσματος εἰς τὸν θάνατον 「わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました」

(12) 新改訳も両箇所はほぼ同じ翻訳だが（「神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロ、および兄弟テモテから」）、コロサイ書では「パウロ」の後の読点がない。逆にフランシスコ会訳は、コロサイ書の方にだけ「パウロと」の後に読点が入っている。

(13) なお岩波訳は、第二コリント書を分割仮説にしたがって五つに切り分け、手紙 A から E の順に訳しているが、これは注解書がなすべき作業であって、翻訳では現在の形で訳出すべきだと思う。

これは、第二パウロ書簡と真正パウロ書簡との微妙な差異が訳出されていない例で、コロサイでは、洗礼「によって」(διά)ではなく「において」(ἐν)だが、その違いが見落とされている。おそらくコロサイ書の翻訳者はローマ書との関連に気づいたが、そのせいでかえって微妙な違いを無視してしまったのであろう。

コロサイ書の著者は、パウロの「死に至る洗礼を通して彼(=キリスト)と共に葬られた」⁽¹⁴⁾という表現の不明瞭さを修正して、洗礼という儀式「において」受洗者はキリストと共に死に、キリストと共に(新しい生へと)甦る、と敷衍したのだと考えられる(しかしパウロ自身はそうは考えていない。パウロにとって復活は未来の事柄だからである。ローマ 6.4 参照)。

(3) コロ 3.25 / ローマ 2.8-11

コロ 3.25: ὁ γὰρ ἀδικῶν κομίσεται ὃ ἠδίκησεν, καὶ οὐκ ἔστιν προσωπολημψία. 「不義を行う者は、その不義の報いを受けるでしょう。そこには分け隔てはありません」

ローマ 2.8-11: τοῖς δὲ ἐξ ἐριθείας καὶ ἀπειθοῦσι τῇ ἀληθείᾳ πειθομένοις δὲ τῇ ἀδικίᾳ ὀργὴ καὶ θυμὸς [...] οὐ γὰρ ἔστιν προσωπολημψία παρὰ τῷ θεῷ 「反抗心からかれ、真理ではなく不義に従う者には、怒りと憤りをお示しになります。[……] 神は人を分け隔てなさいません」

類似の文脈で同一表現を使っているので、コロサイ書がローマ書に依存していることは明白である。新共同訳は、いずれの箇所も προσωπολημψία を「分け隔て」と訳しているが、ローマ書でこれを「分け隔てする」と動詞のように訳しているのは良くない⁽¹⁵⁾。

この語は「顔を取る」(πρόσωπον λαμβάνω⁽¹⁶⁾、レビ 19.15; 申 16.19; 詩 81[82].2; シラ 4.22; 35.13[16]; マラ 1.8; 2.9 他) から来た造語だが、七十人訳には用例がなく、ユダヤ教文献でも「ヨブの遺訓」43.13 にしか出て来ない。この文書の成立年代ははっきり

(14) 新共同訳のローマ 6.4 も翻訳が正確でない。「死に至る洗礼」の「死」は、キリストの死と解する (C. E. B. Cranfield, *The Epistle to the Romans*, vol. 1 [ICC], Edinburgh: T&T Clark, 1975, 304; U. ヴィルケンス『ローマ人への手紙 (6-11 章)』[EKK VI/2]、教文館、1998 年 [原著 1980 年]、23 頁、ほか多数。新共同訳を初め、ここで参照している諸訳も、田川訳以外はこの立場で意識している) にせよ、「キリストの死ではなく、我々自身の『罪の身体』の『死』なのである」(田川『新約聖書』4、189 頁) ととるにせよ、上記のように直訳しておくのが良い。口語訳・新共同訳・新改訳・フランシスコ会訳が用いている「死にあずかる」という訳語は「死に至る」を意識したもの。

(15) さらにエフェ 6.9 でも、この名詞が「分け隔てなさらない」と動詞のように訳されている。

(16) ヘブライ語 פנים אדם の訳であるこの語は「価値を認めたるしに、ひれ伏してあいさつする者の顔を上げさせる」の意 (K. Berger, 「προσωπολημψία」、『ギリシア語新約聖書釈義事典』Ⅲ、教文館、1995 年、216 頁)。

りせず、キリスト教文献以前の用例と見なせるかどうかわからない⁽¹⁷⁾。そこでこの *προσωποληψία* はキリスト教による造語だという見解が出されている⁽¹⁸⁾。その場合は、初期キリスト教文献における用例から見て（ローマ 2.11; コロサイ 3.25; エフェソ 6.9; ヤコブ 2.1; ポリュカルポス・フィリピ 6.1）から考えて、パウロの造語ということになるであろう⁽¹⁹⁾。そうであればますます、語の対応関係が明瞭になるような翻訳上の配慮が必要になる。だが口語訳は、「差別扱い」（コロサイ）・「かたより見ること」（ローマ）という具合にまったく別の訳語をあてており、対応関係が全然考慮されていない。岩波訳も「鼻眞目」（コロサイ）・「かたより見ること」（ローマ）としてしまっている。新改訳も「不公平な扱い」（コロサイ）・「えこひいき」（ローマ）だし、フランシスコ会訳も「特別扱い」（コロサイ）・「分け隔てなさいません」（ローマ）としている。さらに個人訳である田川訳でさえも「人によって差別されること」（コロサイ）・「顔により片寄りみること」（ローマ）という違う訳語を用いてしまっている。

（４）コロ 3.10 / ガラ 3.27

コ ロ 3.10: καὶ ἐνδυσάμενοι τὸν νέον τὸν ἀνακαινούμενον εἰς ἐπίγνωσιν κατ' εἰκόνα τοῦ κτίσαντος αὐτόν 「造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、眞の知識に達するのです」

ガラ 3.27: ὅσοι γὰρ εἰς Χριστὸν ἐβαπτίσθητε, Χριστὸν ἐνεδύσαθε 「洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです」

ここでは、コロサイ 3.11 とガラテヤ 3.28 の対応関係からして、当該箇所文献依存は明らかだから⁽²⁰⁾、「着る」（ἐνδύω）の訳語は揃えた方がよい。田川訳は「着るがよい」・「着た」、口語訳はどちらも「着た」で揃えている（新改訳も同じ）⁽²¹⁾ のに、新共同訳はそれを崩してしまっている⁽²²⁾。岩波訳はこの点、どちらの箇所も新共同

(17) 土岐健治（「ヨブの遺訓」、『聖書外典偽典』別巻・補遺 I、教文館、1985 年 [第 2 版]、370 頁）は、新約聖書との表現上の類似が多いことを根拠に、紀元後 1 世紀と推定する。R. P. Spittler (Testament of Job, in: J. H. Charlesworth [ed.], *The Old Testament Pseudepigrapha*, vol. 1, New York et al.: Doubleday, 1983, 833-834) は「推測」と断りつつ、紀元前 1 世紀後半アレクサンドリアのテラベウタイ派に遡る可能性を考えている。

(18) J. H. Moulton / G. Milligan, *The Vocabulary of the Greek Testament*, London: Hodder and Stoughton, 1930, 553 (Art. *προσωποληψία*).

(19) O. Leppä, *The Making of Colossians* (SESJ 86), Helsinki: The Finnish Exegetical Society; Göttingen: V&R, 2003, 187.

(20) 拙著『偽名書簡の謎を解く』105-106 頁参照。

(21) 口語訳は、「あなたがたは……着た」としているが、「嘘についてはいけない」（9 節）と並列する動詞を分詞形で表す、コロサイ書に特徴的な表現法なので、「着なさい」と訳す方がよい（コロ 3.13 についての田川訳訳注を参照）。

(22) また、新共同訳はコロサイ書でもガラテヤ書でも意識しすぎている。「日々新たにされて」や「眞の知識」といった余分な修飾が目立つし、「キリストに結ばれた」も解釈が入りすぎている。

訳に従っている。フランシスコ会訳も「身にまとっている（コロサイ）・「着ている」⁽²³⁾（ガラテヤ）と不統一になっている。

(5) コロ 3.18 / I コリ 14.34

コロ 3.18: Αἱ γυναῖκες, ὑποτάσσεσθε τοῖς ἀνδράσιν ὡς ἀνήκεν ἐν κυρίῳ 「妻たちよ、主を信じる者にふさわしく、夫に仕えなさい」

I コリ 14.34: αἱ γυναῖκες ἐν ταῖς ἐκκλησίαις σιγάτωσαν· οὐ γὰρ ἐπιτρέπεται αὐταῖς λαλεῖν, ἀλλὰ ὑποτασθήσασιν, καθὼς καὶ ὁ νόμος λέγει 「婦人たちは、教会では黙っていなさい。律法も言っているように、婦人たちは従う者でありなさい」

コロサイ書の「仕えなさい」は誤訳か、それとも（あまりに男性中心のだと思ったので？）「従う」という直訳を避けたのであろう（実際には、同じ訳語を用いている口語訳に追従しただけなのかもしれない）。だがそのせいで、この両箇所も依存関係にある可能性が非常に高いのだが⁽²⁴⁾、そのことが見えにくくなっている。この点は田川訳も意識しているはずなのに（コロ 3.18-24 の訳注参照）、「従え」（コロサイ）・「従属しているべきなのだ」（I コリント）と微妙に違う訳語をあてている。岩波訳も「従属しなさい」（コロサイ）・「服従しなさい」（I コリント）と微妙に異なる。新改訳は「従いなさい」（コロサイ）・「服従しなさい」（I コリント）。唯一フランシスコ会訳が「従いなさい」で統一している。

3. エフェソ書

(1) エフェ 1.4 / コロ 1.22

エフェ 1.4: καθὼς ἐξελέξατο ἡμᾶς ἐν αὐτῷ πρὸ καταβολῆς κόσμου εἶναι ἡμᾶς ἁγίους καὶ ἀμώμους κατενώπιον αὐτοῦ ἐν ἀγάπῃ 「天地創造の前に、神は私たちを愛して⁽²⁵⁾、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました」

コロ 1.22: νυνὶ δὲ ἀποκατήλλαξεν ἐν τῷ σώματι τῆς σαρκὸς αὐτοῦ διὰ τοῦ θανάτου παραστήσας ἡμᾶς ἁγίους καὶ ἀμώμους καὶ ἀνεγκλήτους κατενώπιον αὐτοῦ 「しかし今や、神は御子の肉の体において、その死によってあなたがたと和解し、御自身の前に聖なる

(23) フランシスコ会訳が、アオリスト形の「着た」（ἐνεδύσασθε）を「着ている」と訳しているのは厳密さを欠く意識だと思う。

(24) 拙著『偽名書簡の謎を解く』120-121頁参照。

(25) 新共同訳のように「神はわたしたちを愛して」と訳すのは、ἐν ἀγάπῃ が ἐξελέξατο と離れすぎているので困難を伴う。ἐν ἀγάπῃ は後続する5節 προορίσας ἡμᾶς εἰς υἰοθεσίαν διὰ Ἰησοῦ Χριστοῦ εἰς αὐτόν とつなげる方が良いという見解もあり（例、H. Hübner, *An Philemon. An die Kolosser. An die Epheser* [HNT 12], Tübingen: Mohr Siebeck, 1997, 134）、その方が自然に思われる。

者、きずのない者、とがめるところのない者としてくださいました」

エフェソ書がコロサイ書を下敷きにして書かれていることは広く認められているが、この箇所は、そのことを示す語句的な対応関係がまったく顧慮されていない例である。下線部を付した箇所が違う訳語を用いる必然性は全くない。

(2) エフェ 1.7 / コロ 1.14

エフェ 1.7: Ἐν ᾧ ἔχομεν τὴν ἀπολύτρωσιν διὰ τοῦ αἵματος αὐτοῦ, τὴν ἄφεσιν τῶν παραπτωμάτων

「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました」

コロ 1.14: ἐν ᾧ ἔχομεν τὴν ἀπολύτρωσιν, τὴν ἄφεσιν τῶν ἁμαρτιῶν 「わたしたちは、この

御子によって、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです」

この箇所は、コロサイ書との一致がひと目でわかるほどであるが、訳文だとその一致がやや見えにくくなっている。エフェソ書の訳者は、「贖いを得ている」では妙だから受身の動詞のように訳したのだろうか。しかしコロサイ書の方が訳としては素直だし、そちらに揃えるのが良い⁽²⁶⁾。逆に、コロサイ書が「罪」(ἁμαρτία)の複数形を用いているのをエフェソ書は「罪過」(παράπτωμα)の複数形に書き直しているが、この差異を新共同訳は無視している。口語訳・田川訳は「罪過」と「罪」を訳し分けているし、岩波訳も「過ち」と「罪」にしている⁽²⁷⁾。他方、新改訳とフランシスコ会訳は新共同訳同様、「罪」で統一してしまっている。これら後発の団体訳(岩波訳はコロサイ書とエフェソ書を同じ訳者が担当している)が口語訳の良い点⁽²⁸⁾を捨ててしまったのは惜まれる。

(3) エフェ 1.22 / I コリ 15.27

エフェ 1.22: καὶ πάντα ὑπέταξεν ὑπὸ τοὺς πόδας αὐτοῦ 「神はまた、すべてのものをキリストの足もとに従わせ」

I コリ 15.27: πάντα γὰρ ὑπέταξεν ὑπὸ τοὺς πόδας αὐτοῦ 「『神は、すべてをその足の下に服従させた』からです」

どちらも七十人訳詩編 8.7 からの引用だが、文脈が一致していること(「彼」=キリスト)、また七十人訳では動詞の人称と前置詞が違うことからして(πάντα ὑπέταξας

(26) ただし、コロサイ書ではἐνが「によって」と訳されているが、これはエフェソのように「において」と直訳して差し支えないはずである。

(27) 岩波訳は「贖い」(ἀπολύτρωσις)を、「解放の側面が表に出ない」と、[贖罪論は新約の救済概念の一つの極を構成するが、エフェソ書、コロサイ書では展開されていない]ことを理由に(巻末の「補注 用語解説」における「解放」の項)、「解放」と訳している。しかしこれは、「直訳調を優先させた」(「はしがき」vi 頁)というこの訳の翻訳方針に反しているのではないだろうか。

(28) ちなみに、代表的な英訳聖書でも、RSV とその改訂版 NRSV は “trespasses” と “sins” に訳し分けているが、NEB および REB は “sins” に揃えてしまっている。

ὑποκάτω τῶν ποδῶν αὐτοῦ)、エフェソ書が I コリント書から孫引きしているとわかる。だが仮に直接の依存関係ではないとしても、同じ詩編からの引用で逐語的に一致しているのだから、この程度の訳文なら、意識さえしていれば、揃えることは決して難しくなかったはずである。この「足の下」・「足もと」という微妙かつ不要な相違は、口語訳から継承したものである（しかし口語訳は、πάνταを「万物」と訳す点では統一されている）⁽²⁹⁾。岩波訳は、「すべてのものを……足下に」までは揃っているのに「服従させ」（エフェソ）と「従わせた」（I コリント）という、これまた微妙かつ不要な相違をつけてしまっている。

(4) エフェ 3.8 / I コリ 15.9

エフェ 3.8: Ἐμοὶ τῷ ἐλαχιστοτέρῳ πάντων ἁγίων ἐδόθη ἡ χάρις αὕτη 「この恵みは、聖なる者たちすべての中で最もつまらない者であるわたしに与えられました」

I コリ 15.9: Ἐγὼ γάρ εἰμι ὁ ἐλάχιστος τῶν ἀποστόλων 「わたしは [……] 使徒たちの中でもいちばん小さな者であり」

エフェソ書は、I コリント書のこの有名な表現を踏まえ、「最も小さい者」(ἐλάχιστος) にさらに比較級語尾を付し、「極小の者」(ἐλαχιστότερος) としている(田川訳)。両者の間にある間テキスト性は明らかなので、訳語もそのことがわかるように工夫した方がよい。口語訳は「最も小さい者」(エフェソ)・「いちばん小さい者」(I コリント) と(意図的に?) 訳し分けているが、これでは両者の差異はわかりにくい⁽³⁰⁾。岩波訳(「最も小さな(小さき)者」)やフランシスコ会訳(「最も小さな(小さい)者」)は差異を顧慮すらしていない⁽³¹⁾。

(5) エフェ 4.1

エフェ 4.1: Παρακαλῶ οὖν ὑμᾶς 「わたしはあなたがたに勧めます」

これはパウロが多用する言い回しだが、新共同訳では、箇所によって訳語が異なっている。動詞 παρακαλέω を常に同じ日本語に訳すべきだとは言わないが、このような定型表現の訳は揃えることができるはずである。そうすることで、これがパウロの好む表現であることも、またエフェソ書がパウロの言い回しを真似ているということも、翻訳を見ただけでわかるのだから、違う訳し方をすべきではない。

(29) フランシスコ会訳も「足元」(エフェソ)・「足の下」(I コリント) という不統一な訳になっている。新改訳は、「足の下」で揃えているが、「いっさいのもの」(エフェソ)・「万物」(I コリント) という点が不統一。

(30) 新改訳では「いちばん」と「最も」の使い分けが逆になっていることも、両者に意味上の差異がないことを示している。

(31) エフェ 3.8 を RSV/NRSV は “the very least”、NEB/REB は “less than the least” としている。ルター訳(1984年)は “der allergeringste”。

下記のように新共同訳は、誤訳と思われる 2 例も含めると、7 通りの訳し分けを行なっている。

「(あなたがたに) 勧めます」ローマ 12.1; 16.17; I コリ 4.16; II コリ 6.1(pl.); フィリ

4.2(bis); I テサ 4.1(pl.); 4.10(pl.); 5.14; I テモ 2.1

「お願いします」ローマ 15.30; I コリ 16.15; フィレ 9

「あなたがたに願います」II コリ 10.1

「あなたがたに勧告します」I コリ 1.10:

「優しい言葉を返しています」(誤訳?) I コリ 4.13

「ぜひとも」(? 「愛を発効する $\kappa\upsilon\rho\acute{o}\omega$ 」の意味がわからなかった?) II コリ 2.8

「どうか…ください」ヘブ 13.22

岩波訳は、訳者間での違いが目立つ。パウロ書簡は「勧める」で揃っているが、I テモテ 2.1 では「要請する」、ヘブライ 13.22 では「懇望する」と訳されている。だが「要請する」や「懇望する」だと、元来の「呼びかける」からはだいぶ離れてしまっている。もちろん、「勧める」や「勧告する」という意味が παρακαλέω に元来含まれているわけではないから、田川訳のように「呼びかける」で揃え、それがどのような「呼びかけ」であるかは注解に委ねるとというのが、翻訳としては一番適切であるように思われる。

4. 牧会書簡

(1) I テモ 2.6 / マコ 10.45

I テモ 2.6: \acute{o} $\theta\omicron\upsilon\varsigma$ $\acute{\epsilon}\alpha\upsilon\tau\acute{o}\nu$ $\acute{\alpha}\nu\tau\acute{\iota}\lambda\upsilon\tau\rho\omicron\nu$ $\acute{\upsilon}\pi\epsilon\rho$ $\pi\acute{\alpha}\nu\tau\omega\nu$ 「この方はすべての人の贖いとして御自身を献げられました」

マルコ 10.45: $\delta\omicron\upsilon\nu\alpha\iota$ $\tau\acute{\eta}\nu$ $\psi\upsilon\chi\acute{\eta}\nu$ $\alpha\acute{\upsilon}\tau\omicron\upsilon$ $\lambda\acute{\upsilon}\tau\rho\omicron\nu$ $\acute{\alpha}\nu\tau\acute{\iota}$ $\pi\omicron\lambda\lambda\acute{\omega}\nu$ 「多くの人の身代金として自分の命を献げるために」

この両箇所には伝承史的関連が推測できる。そもそも「身代金」という語が新約では稀だし ($\acute{\alpha}\nu\tau\acute{\iota}\lambda\upsilon\tau\rho\omicron\nu$ はこの箇所のみ。 $\lambda\acute{\upsilon}\tau\rho\omicron\nu$ はマルコ 10.45 と並行箇所であるマタイ 20.28 のみ)、両箇所の言い回しは酷似している。 $\acute{\alpha}\nu\tau\iota$ - の有無には意味上違いがない ($\acute{\alpha}\nu\tau\iota$ - の方が「代理」の側面を強調した感じになる)。「与える」という動詞も一致している。したがって I テモテ書は「身代金」と訳した方が良いが、おそらくパウロ的「贖い」に引きずられてこの訳語が選ばれたのであろう。パウロは同じ意味のことを言うのに $\acute{\alpha}\pi\omicron\lambda\acute{\upsilon}\tau\rho\omega\varsigma$ ($\lambda\acute{\upsilon}\tau\rho\omicron\nu$ に「~から」を示す接頭辞 $\acute{\alpha}\pi\omicron$ - と、抽象名詞を作る語尾 $-\omega\varsigma$ を付して、身代金を払って買い戻す行為を示す) を用いている (ローマ 3:24; 8:23; I コリント 1:30)。したがってパウロの場合は「贖い」が良いが、I テモ

テ書の場合は意味がずれる⁽³²⁾。

「身代金」と訳しているのは岩波訳と田川訳。口語訳や新改訳、フランシスコ会訳は「贖い（あがない）」としている。釈義的検討の結果として訳語が選ばれているかどうかの違いが出ているように思われる。

(2) I テモ 2.7 / ローマ 9.1

I テモ 2.7: ἀλήθειαν λέγω οὐ ψεύδομαι 「わたしは真実を語っており、偽りは言っていない
ません」

ローマ 9.1: Ἀλήθειαν λέγω ἐν Χριστῷ, οὐ ψεύδομαι 「わたしはキリストに結ばれた⁽³³⁾
者として真実を語り、偽りは言わない」

この両箇所は、ほぼ逐語的に一致しており、牧会書簡の著者はローマ書から引用したと見て間違いはない。新共同訳の訳文もだいたい揃っているが、ローマ書の方がなぜ 9.1a においてのみ「です・ます」調をやめたかはよくわからない。

5. 結論

以上の検討から、聖書翻訳、とりわけ新約の第二パウロ書簡を翻訳するには以下の点に留意する必要があることがわかる。

- (1) 第二パウロ書簡は真正パウロ書簡の言葉づかいを模倣・援用することで「パウロらしさ」を出している場合がよくあるので、同じ単語や表現が用いられている場合は、出来る限りそのことがわかる訳語を選択すべきであり、そのためには文書間での訳語の調整が必要である。しかし、上掲の諸例が示すとおり、新共同訳ではその調整がなされていない⁽³⁴⁾。これが新共同訳だけの問題ではないことは、比較的最近の出版である新改訳第3版やフランシスコ会訳合本にも同様の不統一がしばしば現れる事実からわかる（II テサ 2.1; 3.5; コロ 3.25; エフェ 1.22 など参照）。こういった「団体訳」では、真正パウロ書簡と第二パウロ書簡を別々の訳者が担当していると考えられるが、その場合には、異なる文書の訳

(32) 「身代金」「贖い」の用語法については、田川『新約聖書』IV、144-145 頁（ローマ 3.24 への訳注）および同『キリスト教思想への招待』勁草書房、2004 年、191-205 頁参照。

(33) ἐν Χριστῷ を「キリストに結ばれた（者として）」と意識するべきでないことは、田川訳が再三再四指摘しているが、フランシスコ会訳もこの訳語を採用している。他の諸訳には見られない訳語なので、フランシスコ会訳は新共同訳を真似たのであろう（あるいは同じ訳者だったか？）。

(34) 中には、口語訳ではきちんと統一されていた訳語が新共同訳で乱れてしまった例もある。II テサ 3.8; コロ 3.10。エフェ 1.7 では、口語訳が「罪過」と「罪」に訳し分けていたものを新共同訳が「罪」で統一してしまっている。

者間で摺り合わせを行う必要がある⁽³⁵⁾。岩波訳でも、第二パウロ書簡と真正パウロ書簡との間で訳語の統一が図られた様子はいかがわれない⁽³⁶⁾。

- (2) 逆に、第二パウロ書簡が真正パウロ書簡との微妙な差異を出そうとしていることが見逃されてしまっている翻訳例もある（Ⅱテサ 1.10; エフェ 3.8; さらにエフェ 1.7 も参照）。差異を出しているというのも、真正パウロ書簡との間テキストに気づいて初めてわかる事柄なので、真正パウロ書簡との（あるいはエフェソ／コロサイのような、第二パウロ書簡内部での）対応関係には十分注意する必要がある。
- (3) こういった対応関係は、当然ながら当該箇所を釈義した結果としてわかるものである。的確な翻訳は釈義の成果として現れる（コロ 2.12 / ローマ 6.4, および I テモ 2.6 / マルコ 10.45 の対応関係など）。それゆえ、拙速な翻訳作業とならないよう、釈義に十分な時間をとった上で翻訳がなされる必要がある。新共同訳聖書は、旧共同訳聖書（1978 年刊行）の改訂版として、わずか 9 年の間で刊行に至ったが、その事情が、ここに指摘したような訳文の不備を生じさせた大きな原因だったのではないだろうか。

（本稿は、日本学術振興会 2012-2014 年度科学研究費補助金 [基盤研究 C] 「新約聖書偽名書簡についての文学的研究：擬似パウロ書簡を中心に」（課題番号 24520359）の助成を受けた研究成果の一部である。）

(35) また、新共同訳や、現在翻訳が進行している仮称「標準訳」では、翻訳された原稿の日本語だけをチェックする担当者があり、さらにその後にも訳文の検討がなされることになっているが、これら日本語担当者等が、訳者がせっかく配慮したその対応関係を壊すことのないよう注意する必要がある。

(36) 個人訳である田川訳でも、コロ 3.25 や 3.18 のように、訳語が統一されていない例が見受けられるが、今後台本が作られる際に調整が図られるものと思われる。